

## 「櫓やぐらを組む」

高校生活と聞いて思いだすシーンは人によってバラバラだろうが、ここE高の卒業生たちは口を揃そろえて運動会だと胸を張る。「体育祭」ではなく「運動会」。泥臭い感じが加わるからだろうか、なぜだか伝統的にE高ではそう呼ぶことになっている。

運動会では学年横断で生徒たちが四つのグループに分けられて、競い合う。青柳、紫雲、紅樹、黒潮。それぞれ色にちなんだ名前である。

夏のあいだ、生徒たちは運動会にすべてを注ぐ。勉強そっちのけ、部活そっちのけ。そして、それを許す教師たちの熱い眼差し――。

そんな運動会で、伝説が生まれぬはずがない。運動会の準備では、各グループの生徒たちが細かく班に分かれて作業を進める。

劇で使う舞台を作る「大道具」。太鼓を乗せる台を作る「中道具」。小物を作る「小道具」。この

道具系の生徒のひとりがかつて作業に集中しすぎ、気づけば鑿のみと槌つちを手放したまま、素手で道具すべてを完成させてしまったことがあるという。

巨大パネルにモチーフとなる絵を描く、「パネル絵」の生徒。魂をこめて描いた人物に命が宿り、本番前夜に絵がパネルから抜けだした。が、生徒一丸となつて捕物よろしく路地に追い詰め、縄で縛つて無事に絵の中に戻したらしい。

そんな逸話が山ほどあるのがE高なのだ。

そして、数ある班の中でも一番熱いとされるのが、生徒が座る櫓やぐらを組む、通称「ヤグラ」。彼らの運動会にかける情熱は半端ではなく、それに比例するように伝説も数多く残されている。

E高の櫓づくりは、竹を手に入れるところからスタートする。みんなで近くの竹山に出かけていって、竹を切る。そして生徒たちの力だけで櫓を組みあげてしまうのだ。

このヤグラを仕切るオサは「ヤグ長」と呼ばれ、集まってきた猛者どもを統べている。無論、絶対的な地位にあり、グループのリーダー「グル長」

さえも凌ぐことがあるほどだ。

さて、その年の運動会では、このヤグラが新たな伝説を生み出すことになる。

グループ「青柳」のヤグラ長が、あるとき突然こんなことを言いはじめたのが発端だった。

「なあ、今年の櫓は、一番高いところに板を渡せたグループに特別点が入るといっうのはどうだろ  
う」

櫓は通常、どんなできであろうとも、運動会の加対象になることは決してない。だから影の立役者とも呼ぶべき存在で、それが彼らの美学なのだ。しかし、青柳ヤグラ長の言葉はその美学に反している。例年なら、いくらヤグラ長と言えど、他グループのヤグラ長はじめ全員から猛反発を食らうだろう。

ところが、その年のヤグラには血気盛んなやつが多かった。チャレンジングな試みとして、すぐさま議論の場にあげられたのだ。

「……それじゃあ、満場一致で決定でいいな？」  
場を取り仕切っていたひとりが言った。

全員を見渡すも、異論を唱える者はいない。

「決定だ！」

わあっと大きな歓声が響く。教室の外で話し合  
いの行く末を見守っていた生徒たちは、「号外、  
号外！」と叫んで校内を走って回る。

決議はすぐに全校生徒に知れ渡り、一気に今年  
の目玉企画に押しあげられた。

提案者の青柳ヤグ長。彼は何としても負けられ  
ないと、強い責任感に駆られていた。

「櫓対決に臨むにあたって、まずは基本のおさら  
いをする」

彼は自グループのヤグラの要員を集めて言った。  
櫓の基本の組み方は、こうである。

まず地面に深く穴を掘り、そこに竹を差しこん  
で基礎となる柱をつくる。それを何本も並べると、  
次は人が乗れるよう、柱と柱のあいだに板を順番  
に渡していく。板を固定するための縄は「ヤグ  
縄」と呼ばれ、普通の縄とは一味ちがう。水を張  
ったポリバケツに縄を一週間ほど漬けこむことで  
完成するのだ。そのとき縄から滲<sup>し</sup>みでてくるのが

「ヤグ汁」で、ポリバケツはこのひどい悪臭を放つ液体で満たされる。

「おい、ヤグ汁で遊ぶんじゃない！ あれだけ注意しただろうが！」

ヤグ長は、臭い汁をかけてじゃれあう生徒二人を見つけて一喝した。毎年、必ず見られる光景だ。どぎつい汁は、男子たちの子供心をくすぐるらしい。じつはヤグ長も一年生のときに通った道だが、そんなことはおくびにも出さない。怒られた二人は、しゅんとなった。

「今年は特に特別点がかかってるんだ。櫓もあと少しで完成するんだから、気を抜くな！」

はい、と元気よく声があがる。

ヤグ長は運動会の準備がはじまってから、ずっとピリピリ状態だ。自分から提案しておいて、勝負に負けるわけにはいかない。有終の美を飾って卒業するのだと意気こんでいた。

と、そこに同じ青柳の副ヤグ長が青い顔でやってきた。

「ヤグ長！」

「なんだ、どうした？」

進捗の報告だろうか。悪いニュースならば聞きたくはない。すべて根性で乗り切れと、これまでもずっと鼓舞してきた。

しかし副ヤグ長の言葉は、予想を遥かに上回る衝撃的なものだった。

「このままだと、我々の最下位は決定的です

……」

「なんだと？」

ヤグ長の顔はみるみるうちに真っ赤になる。

「どうということだ！」

詰め寄られた副ヤグ長は、身を震わせながらも進言した。

「あれを見てください」

近くに立つ他グループ、紫雲の櫓に指を差す。

「ぼくたちは大事な点を見過ごしていたんです」

「なんのことだ。分かるように説明しろ」

凄むヤグ長に、副ヤグ長は口を開いた。

「この勝負で問われているのは、櫓に渡す板の高さのほずです」

「無論だ。おれが提唱者なんだから」

ヤグ長は胸を張る。

「……ですが、そうなると必然的に、そもその柱の高さが勝負を分けることにはならないでしょうか」

「小難しい言い回しをするな！ もっと分かりやすく言え」

「いえ、その……柱が高いほうが、より高いところ  
に板を渡せますよね？ 逆に言うと、柱が低いと負ける可能性はとても高い。その点うちの櫓は根本的な柱の高さで他グループに劣っているのです、このままだと負けてしまうと思ったわけですから……」

ヤグ長は、改めて他グループの櫓を見た。たしかに、柱を深く埋め過ぎたせいか、使った竹の長さが元々短かったせいか、青柳の櫓の頂上は明らかに低かった。

「ううむ……」

なんてことだと、ヤグ長は頭を抱えた。目の前の仕事に集中するあまり、視野が極端に狭くなっ

ていた。こんな単純ミスなど、あつてはならないことである……。

しかしそこは猛者のオサ。すぐさま頭を切り替えた。

高さが足りないのなら、竹を上<sup>つ</sup>に接ぎ足して高くすればいいだけではないか。竹に竹を接ぐのは不安定？ 知ったことか。勝負の世界にリスクはつきものだ。

「こんなことは最初から想定していた」

ヤグ長は、平静を装って副ヤグ長に告げる。

「では、何か対策が……？」

「対策も何も、すべては想定内のことだ。相手を油断させるために、あえて秘密にできていたまで。いいか、竹の柱に竹を接いで、高さをぐんと稼ぐんだ！」

これには副ヤグ長も度肝を抜かれた。そんな方法があつたなんて……彼はヤグ長の戦略に胸を打たれ、改めてこの人についていこうと心に決めた。「ただし、作業には危険が伴う。ヤグ縄でしっかり固定するのを忘れるなよ！」



「はい！」

次の朝。紫雲のヤグ長は、青柳の櫓を目にしてぎよつとする。一夜で高さが倍になっているではないか。

いったい何が起こったのか、しばらく理解できずに呆然ぼうぜんとした。そして我に返って事情を悟ると、「その手があったか！」と膝を打った。

青柳のヤグ長をのろまと内心嘲って、あぐらをかいていた彼は、のろまは自分のほうだったのだと焦りだす。すぐに要員を集めて声をあげる。

「おい、何をほんやりしてるんだ！　うちもやるぞ！　追いつけ追いこせだ！」

かくして青柳につづいて紫雲でも、竹に竹を接ぐという荒業が導入された。

こうなると、残りの二つ、紅樹と黒潮も騒ぎだす。

「乗り遅れるな！」

ヤグラの生徒は総出になって、竹接ぎ作業に躍起になった。

「竹が足りない！　切ってこい！」

すぐさま追加の竹が供給されて、接いだ竹にさらに接ぐ。

足場を組んでいる暇はない。命綱を腰に巻き、渡した板を頼りにして、生徒たちは竹に昇って作業をする。

青柳、紫雲、紅樹、黒潮。四つのグループの櫓ともどンドン高くなっていき、ついには校舎の高さを超えるまでになってしまった。

「くそ、ここに来て挽回ばんかいしてきやがった！」

青柳ヤグ長は歯ざしりをする。

他グループの櫓を見ると、いつの間にか少しだけ追いこされているではないか。このままでは負けてしまう。ともすれば、あつという間に置き去りにされて惨敗を喫することになるだろう。危機感と緊張感に襲われる。

もつともつと上を目指さねば勝利はない。仲間たちに檄げきを飛ばす。

「おい、次の竹が来てないぞ！ 急げ！」

竹を制したものが櫓を制す。早く次を持ってこい。

そう煽<sup>あお</sup>ろうとしたときだった。

生徒のひとりが血相を変えて飛んできた。

「ヤグ長！」

「なんだ」

「もう竹がありません！」

生徒は泣きそうな顔になっている。

「竹がない？」

ヤグ長は眉を吊<sup>つ</sup>りあげる。

怒鳴られる前にと、生徒は必死になって弁解する。

「ちがうんです、ほくらじゃどうしようもないんです。伐採しすぎて竹山がもうハゲ山なんです」

「……なんてことだ」

ヤグ長は思わず眩<sup>つぶや</sup>いた。

竹がなければ作業を進めることなどできやしない。かと言って、いま竹を接ぐのをやめてしまうと負けが確定してしまう。それだけは、絶対に避けねばならない……。

「どうしましょう」

生徒はヤグ長と現実のあいだの板挟みになり、

卒倒しそうになっていた。

ヤグ長はしばし思案し、こう叫んだ。

「どうしようも、こうしようもない！」

一喝すると、つづけて叫ぶ。

「いいか、人生というのは、やるかやらないかのどっちかなんだ！ なんとかしろ！」

必死さの中で、人は人生訓を手中に収める。

「そう言われましても……」

「ええいつ、竹がどうした！ ないならないで、下から順に解体して上に回せばいいだろう！」

「それじゃあ櫓が倒れてしまうんじゃない……」

「常識に捉とらわれるな！ なんとかなる！」

もはや理屈も何もあつたものではなく、周りの生徒も誰もが呆あっけ気にとられてしまった。副ヤグ長も、口をあんぐり開けている。

が、ヤグ長の凄すさまじい形相に気圧けおされて、とうとうひとり「ままよ！」と思ひ、櫓の竹——支えになつてゐる箇所の一部に刃を入れた。

と、信じられないことが起こる。

どういう力が働いたのか、支えがなくなつたに

もかかわらず、櫓は微動だにしなかったのだ。

熱気の漲る異常な空気の中において、つづいて

別の支えにも刃が入れられる。

傾かない。

勢いを得た生徒たちは、次々に支えの竹を切つていく。

それでも決して倒れずに、とうとう櫓は見えない柱に支えられているかのごとく、きれいに宙に浮かんでしまった。ヤグ長は目を瞠りつつも、勝ち誇ったように言う。

「ざまあみろ！」

いったい誰に向かっての言葉かは不明だったが、結果は結果。

事実、櫓は宙に浮かんだのだ。男たちの情熱が物理法則を超えた瞬間だった。

「おい、青柳の動きがおかしいぞ！」

すぐさま気がつき、他グループはざわつきはじめる。

「そうか！」

と、紫雲、紅樹、黒潮のヤグ長。

「竹がなければ下から回せばいいだけのことだったか！」

目から鱗うろこの三人は、生徒たちに指示を飛ばす。やがて全グループの櫓が宙に浮かび、どんどん上へと伸びていく。もはや留とどまるところを知らない彼らは、雲の上を目指して櫓を組む。

竹は下から上へと循環していく。生徒たちは櫓の上で自炊をし、昼夜を惜しまず作業に打ちこむときどき地上にヤグ縄を降ろし、物資を引きあげたりもする。宙を見渡し、他グループの進捗を確か認する――。

その後も櫓は天に向かって昇りつづけ、ついには町一番の山の高さをも超えてしまった。

だが、生徒たちは一切手を緩めない。緩めたときが、負けなのだから。

勝負はまだまだ、これからだ。

「こら、何ほーっとしてる！」

青柳のヤグ長は、あるときひとりを注意した。

その生徒は、ほんやり景色を見下ろしていたの

だ。

そいつの目線を追った先——城下には、十五万石の美しい町並みが広がっていた。夏はとっくに過ぎ去って、秋を越え冬を越え、いまや桜の季節になっている。

眼下には、桜吹雪の舞い散る中、涙にむせぶ高の卒業生たちの姿があった。

ヤグ長は細めた目で、しばらくそれに眺め入る。「……さあ、やるぞ！」

ヤグ長は他グループの櫓の位置を確認すると、汗をぬぐって再びせせと櫓を組むのに精をだす。